南洲大戰役の進行に其注意を加へたるものは一人としてクラウゼヴィツツの露日本の勝利を指導し露國の敗績に其流涕を行へるを見る能はざる者あるべし日本の作戰計畫その先師の理想に達する能はざりし單一の場合――即ち遼陽――に於て其之に價せざる完全なる勝利遂に得られざりしは亦頗る注意すべき所なり

ドラゴミロッフ其試みたる業の徒勞に屬したるに對して果して如何の言を爲さんと欲するや我等は之を聞かんことを欲するの好奇心を有するものなり

（二十三日所論）

三十八年五月十六日時事

タイムスの日露戰爭批評（百八十八）

（三月廿五日東京發電報所論）

奉天の會戰（後論二）

我等の今朝の紙上に掲載せる五面の地圖は奉天の城下に戰はれたる大會戰の一般を讀者に示さんとするの意に成れるものなり此戰はアウステルリッツ、ウォータールーと共に列せらるべきものにして近時の最大にして且つ最決勝的なる戰鬪の一に數へらるべきものなり

此大戰鬪に關して我等の細密なる報告に接するは尚は數週日の後なるべく尚は我等をして双方の運動を一つ〳〵に探るを得せしめ之が原因及び結果に研究を加へるを得せしめ行動の全般に對して道理ある判斷を加ふるを得せしむるが如き戰鬪各局面の地圖及び報告我等の許に達するは確に數年の後ならざるを得ざるべし然れども戰鬪の一般性質は既に明瞭なり其主要なる形狀を茲に叙述し國民的戰爭の此發作期と稱すべきもの一間に於ける双方大部隊兵の位置如何其最も實に近きものを概論する亦敢て難しとせざるなり

此目的に對し我等は此行動中より五箇の局面を摘出せり即ち此戰鬪の經過したる各段階中その特徴とするものを掲げたるなり我等の摘出したる此各局面に對し其知られ得る限りの一般形勢を回顧せしめんとするには簡短なる説明みの圖に附せらるゝを以て足れりとすべしとす

第一局面（自二月十九日至同二十八日）第一圖

日本の第一攻勢運動は二月十九日その春翼に依りて起されたり斯くて五日後に至り清河城にありし強大なる露軍枝隊は其防禦工事内より驅出され北方に擊攘されたり二月二十四日に至り黑木將軍の第一軍本溪湖方面よりカオッ嶺（高麗嶺？）に向け前進し本溪湖の北方及び西北方約十里に存せし其前進陣地より露軍を驅攘せり此進軍と同時に野津將軍の軍は沙河に於て其進軍を初め勝利を得たり斯くて其攻擊は極度まで遂行さるゝことなく自ら其威嚇的性質を保てり

此等の運動は二十四日より數日に亘りて着々繼續され其一般の結果は露軍指揮官の注意を其中央及び左翼に牽制し其兵を此方面に招致し漸次その激を加へ來たれる戰鬪に戰線の大部分を忙殺したるにあり此等の巧妙なる配置幾許度合せでクロパトキンの決意を動かし得たるや我等は尚は精密に之を語るみと能はず然れども二月末中露兵の著大なる員數カオッ嶺及び馬群丹方面に向け移されたるは事實なるが如く露軍指揮官三月一日を以て報じて其攻勢を取れるを得せるは現に之が證なりとすべし露軍指揮官實際に於て其攻勢を取り而も到る處みな其効を收むるみと能はざりし斯くの如くにして本戰鬪の計畫その宜しきを得たる準備時階段は日本參謀本部の明に豫期したる一切の結果を之に收めしむるを得たるものなるが如し慎潤なる前面全部に亘りて兩軍の間に間斷なき砲戰行はる今は決勝的攻擊を加ふるの時機既に至れるなり

（二十五日所論未完）

三十八年五月十七日時事

タイムスの日露戰爭批評（百八十九）

（三月廿五日所論つゞき）

奉天の會戰（後論二）

第二局面（自二月二十八日至三月四日）第二圖

奥、乃木兩將軍の軍は尚は戰場に加はるに至らざりし然るも二月二十八日に於て奥の軍は沙河兩河の間に展開し同時に其左方に於て乃木軍團、遼兩河の間を北方に向け極度の速力を以て前進せり此運動剛勇と敏速とを以て行はれたるが爲め能く其抵抗を壓伏するを得露軍之に邀擊を加へたるに關せず盡く成効を以て其目的を行ふを得たりクロパトキンは三月一日に至り初めて此運動を覺知するを得三月二日を以て電報して之が輜重運動に抗する爲め其行動の取られたるを稱せり然れども之が危險を覺知するみと僅に遲く且つ其取りたる行動また充分なるを得ざりし彼の兵は右翼に於て忽ちに奉天の方向に發退され乃木將軍は速に其兵を配置して露軍の退却線に其攻擊を加へ得るの準備を爲せり

然れども露兵を其中央および左翼に繫縛し置く爲めには黑木、野津兩將軍の軍大事の場合に其苦業を忍ぶを以て最も必要なりとす即ち露軍をして決勝的攻擊に對應する爲め其兵を退くるを得せしめざらんが爲め之に自家の兵を犧牲に供するを必要とするなり是を以てか右兩軍の前面には全部に亘りて激戰生じ砲戰漸次猛烈なるに至り若干の地點に於ては日本軍大損害を負うて擬退されたり然るも此等は大體に於て其目的を達したる者なり何となれば當に儲地點に於て其位置を守持し得たるのみにあらず尚は若干の方面には進歩を見たるものあり露軍約三分二の兵力を之に牽制し得たるを以てなり三月五日に至るまでクロパトキンは其右翼に於ける敵軍の攻擊に甚だしく妨害を加ふるに足れる其兵を有せざりし此敵軍は此時に至りて既に其轉回を行ひカウルバース將軍をして馬家堡より北々東に走る線上に於て西方に面せざるを得ざるに至らしめたり

（二十五日所論未完）

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

三十八年五月十八日時事

タイムスの日露戰爭批評（百九十）

（三月二十五日所論つゞき）

奉天の會戰（後論三）

第三局面（自三月五日至同七日）第三圖

三月五日に至り露軍は敵の之を打擲するに容易なりとし且つ便利なりとする位置に追ひ込まれ丁はれか其中央專ら防守に力め左翼は擊退され右翼は全然轉回され たり戰鬪は間斷なく繼續し敵の目的今は最早や疑ふの餘地なくクロパトキンは此決勝的攻擊を擊退する爲め斯く其移し得べき兵を驟く奉天の方向に移すに至れり奥將軍に對する露軍豫備隊第一回の眞面目なる攻擊は三月五日を以て行はれたるが如し此兵新民屯街道に沿ひ短距離の間進擊を試みたれども幾くもなくして擊退され乃木將軍の戰線此頃ひに至り漸次奉天の北方に擴張し漸く包圍の性質を帶すに至れり此軍大なる攻擊に對應するに足るの成効露軍戰線の何れの部分に於ても得らるゝみと能はず三月八日に至りクロパトキン其中央及び左翼を渾河の後方に撤退しカウルバース及びビルデルリングの軍中より其目的の爲めに集め得べき一切の單位を集め奥及び乃木に其攻擊を加ふるに決せり

第四局面（自三月八日至同九日）第四圖

此時期に於ける露軍の悲慘なる位置は第四圖に依りて能く之を窺ふを得べし露軍の左翼に於てリチヴイッチ黑木の攻擊に依り甚だしき損害を受くるのみとなく露國第一軍差ひたる損失なくして渾河の線上に其退却を行ふを得之に陣地を取り以て抗防の準備を爲せり

然れども奉天にありては形勢急速に困難を加へ來たれりカウルバースの軍既に疲爛し豫備隊また殆ど皆用ひ盡くされ加ふるにビルデルリングの第三軍三月八日を以て奉天に驅逐され局限せられ地帶内に甚だしき兵の密集を見るに至り敵軍北方を除くの外各方面よりして市街に近迫し來たり漸次之が集團火力に驅出されり然るに關せずクロパトキン此位置を脱逸せんとするに於て最も勇敢なる行動を爲し先づ四十箇大隊の兵をして敵軍に其攻擊を行はしめたる後更に自ら六十五箇大隊の兵を提げ其攻擊を繼ぐに至れり此等の行動確に奥、乃木兩將軍の進軍を阻止するに効あり一時は日本の司令部に甚だしき不安の念を與へり何となれば其逆襲甚だしき勇氣と決意とを以て行はれ之を擊退するが爲め其決勝的攻擊の衝動力幾分か鈍らされたるを以てなり然れども此危急の際に當りてクロパトキン其中央軍より重大なる報に接せり初めビルデルリング、リチヴイッチ渾河に退却するに當り兩軍の接觸を保持するに充分の注意を加へざりし是を以てか渾河の線突破され奉天の東二十露里クイサン日本軍に依り占領せられ至れり之が報クロパトキンの許に達したるは三月九日午前十時なりし同日北方に於て乃木は露軍の退却線を遮斷せんとして其戰鬪を行ひ居たり二十四時間を經くせば露國の第二、第三兩軍全然破壞さるゝか又は捕獲さるゝを免れざりしなるべし三月九日黄昏總退却の命は即ち傳へられたり（二十五日所論未完）

三十八年五月十九日時事

タイムスの日露戰爭批評（百九十一）

（三月二十五日所論つゞき）

奉天の會戰（後論四）

第五局面（自三月十日至同十二日）第五圖

日本軍の攻擊包圍性を帶び居たる爲め奉天及び奉天の附近にある露軍の著大なる部隊は其退路を得るみと能はず日本軍三月十日午前十時を以て其市街を占領したるに關せず敵團の露軍尚ほ近傍の村落、陣地等にありて三月十一日に至るまで其抵抗を繼續せり然るも三月十日夕乃木は渾河の線を占領し直接に露軍の退却本線路を遮斷し奉天より北方に達する一切の道路を攫握せり敵軍の一部九日のクロパトキン逆襲に掩護され既に遁逃したるものあるべしと雖も尚ほ殘留したる諸部隊は其車輛を放棄し混亂して連山の間を亘り其遁走を試みざるべからざるに至れり リチヴイッチのみ僅に其隊形を維持するを得黑木に其大膽なる前面を示し其右翼より梯形を爲して退却を行ひ爾餘諸軍の潰走を幾分掩護し得たるが如し三月十二日に至り露軍は奉天の北方廿六哩に於ける諸地方より悉く驅攘され滿洲三箇軍は破損し潰亂して勿忙其退却を行へり斯くの如くにして追擊却を除き十五日間に亘りたる奉天の大戰は其勝敗既に定まれるなり（二十五日所論完）

三十八年五月廿日時事

タイムスの日露戰爭批評（百九十二）

（三月廿七日東京發電報所論）

奉天後の追擊戰

敗退軍隊に對する追擊戰は當該軍隊その陣地を放棄し其退却を初めたる時より起算すべきものなり露國軍隊は三月九日黄昏に於て奉天より退却すべしとの最終命令を得たり一般戰鬪より區別すべき追擊戰なるものは同時刻より初まりたるものなり日本軍三月十日午前十時を以て奉天を占領し孤立したる枝隊および集團に對する戰鬪は市街附近に於て三月十一日に至るまで繼續し同日に至りて此部面に於ける抵抗遂に終止せり

此間に於て乃木將軍の露軍退却線路上に於て渾河の陣地を占領したるは第二、第三の兩滿洲軍をして混亂また收むべからざるに至らしめたるものなり北兩滿洲軍直路より山嶺に追ひ込められ死傷頗多敗の損害を出だし車輛の大部分を放棄したる後四離潰襲の狀となり漸く潰走するを得たり此地方の山脈東西に連亘し斷崖を爲して川流に連なる此兩軍の關する限り奉天よりの退却は正しく潰亂と稱すべきものなり唯だリチヴイッチわり第一軍を率ゐて其奮鬪を繼續し之に依りて或る程度まで其戰友の退却を掩護し之が殘部をして鐵嶺に滴り還るを得せしめたり三月十二日に至り露軍の後衛は奉天の北方二十六哩にありリチヴイッチの兵鐵嶺南方の山脊に其陣地を取り之が保護に依りて敗殘軍隊の生存兵その隊形らしきものなりとし之を維持せんとして其戰力を行へり三月十五日日本前衛の先頭隊ふの山脊に於て敵と交戰し同時に其並行縱隊その陣地を包圍せんとして之が計畫を試みたり是を以てか露軍三月十五日夜に於て其退却を繼ぎ鐵嶺を放棄し同地は三月十六日朝午前十二時二十分を以て遂に日本軍の手に落ちたり同日日本の迂回縱隊鐵嶺の北方遼河西岸に於ける高地を占領し其夜退却中の露軍後衛に對し其砲擊を加